

幼児の四季



冬

上 沢 謙 二

「どこへいっちゃったの。みんななくなっちゃった」

庭のすみにしゃがんでいたKちゃんがいきなり聞いたので、なんだかわけがわからなかった先生は聞きかえした。

「誰がいなくなったの。みんなあそんでいるじゃないの」

昼さがりの園庭に、園児たちは入りまじり入りみだれてあそんでいた。

「うん、虫だよ。どこへいっちゃったの。みんななくなっちゃった」

Kちゃんは、おなじことをいって、じっと地面を眺めた。

おそらくKちゃんは庭のすみのそのところで、春も、夏も、秋も、いろいろな虫に遇ったのだろう。それが冬の今は、いくら待っても出てこない。ふしぎでもあつたらう、不満でもあつたらう、さびしい気もしたらう。

そういう感情が入りまじって、突然の質問になつたのだらう。

「なるほど……なるほど……」

先生はうなずかないではいられなかった。

そうだ。あの蟻も蛇も這わない。蝶も燕も飛ばない。鶯も鈴虫も鳴かない。天上も地上もからっとしている。それが冬の姿である。

野も、山も、からっとする。そこにはもう緑の絨毯じゅうたんはない、紅葉の錦着にしきぎはない。はだかになって、地肌が、山肌やまはだがあらわになる。

木々も葉を払いおとしてはだかになる。それで、先生がいう。

「木を見ましようね。冬は木の形がよく見える時です。桐の木や、桜の木や、銀杏の木や、ちがいますね。さあ、そのまねをしましょう。木のようにまっすぐにちゃんと立って。両手をたいらに横へ伸ばして。そう、桐さんの枝はそうなっていますね。こんどは両手をななめに上へ伸ばして。そう、桜さんの枝はそうなっていますね。こんどは両手をまっすぐに上へ伸ばして。そう、銀杏さんの枝はそうなっていますね。」

冬は、人は着物を重ねるが、自然は衣をぬぎすてる。そうして真相をあらわす時である。

だから、冬には飾りけがない。したがって変化が少ない。賑やかさが乏しい。遊びたくてたまらない子どもたちは物足りない。せめてごうごう吹く風が相手だ。その中へとびだしてわあわあさわぐ。「風の子」といわれるくらいだ。

ところが、その単調を破るために、自然はえらい用意をして、たいへんな芸当を演じる。

ふと、朝、目がさめる。なんだか、いつもとちがって、外の世界がシーンとしている。半身をおこしてなにげなく見まわすと、思わず目がパチパチとなる。窓を通して、部屋の中が明るい。その明るさがお天気の時のこととちがう。目を挙げて外を見る——途端に、大きな声かとびだした。

「あっ、雪だ」

同時に、パツと立ちあがる。

戸を押して見る。庭も、道も、野も、畑もない。ただ一面に真っ白。家も、森も、山も、ただ一様に真っ白。天地は白一色の天地になってしまったのだ。

それがたった一夜のうちに、誰も知らないうちに、そうなったのだ。急変化といってこんな急変化が、大変化といってこんな大変化があるだろうか。まさに「たいへんな芸当」である。これこそ自然でなければできない芸当だ。

だから、子どもは我を忘れておどりがあがる、とびだす、かけまわる。たちまち向きあって雪投げがはじまり、いっしょになって雪だるまつくりがはじまる。「わっわっ」という喊声と歓声が入りみだれて、おもてはたちどころにたのしい一大運動場に化する。

それとはまったく反対な場面。

みんなじっとしている。だまっている。そうしてならんでいる。誰もうごかない、話さない。だから、音もない、声もない。

二人寄ればしゃべりだす、三人寄ればさわぎだすのが幼児の常である。それがここでは五人、十人集まってい、いるかいないかのしずけさである。

なにがそうさせるのか。

みんなの頭のさきから足のさきまで、太陽の光がやんわりとふうわりと包んでいる。それがそうさせるのである。「日光浴」とはよくいった。ほんとうに大きな特別な湯槽ゆばねの中にひたっているようだ。

なんというよい気持だろう。「よい」というだけではない。ゆったりとしたうっとりとした気持である。それでも足りない。溶けこんでしまうような融け入ってしまうような気持である。否、それ以上である。なんとなくなつかしい、しんみりとした気持がおのずから湧いてくるのである。だから、ことばを交わさないでも、手を組まないでも、おたがいに心は通じ、思いはつながっていると感ずるのである。それで安心して、満足して、だまってじっとしているのである。

これが、冬の日なたの情景である。

「雪」と「日なた」。前者はよろこびの伴う興奮を与え、後者は満足を含む平穏を贈る。

冬の自然はそういう反対の環境を用意して、それぞれちがった意味と効果をもつ教育を、おのずから施してくれる。子どもに対して、なんと親切であり、適切であるだろう。

更に、この期に「お正月」がやってくる。

世界じゅうの子どもは、白い、黒い、黄色いの差なく、富める、中産、貧しきの別なく、健康、病弱、不具のちがいがなく、一斉に、平等に、一才を加える。

「一つ大きくなった」ということほど、子どもにとって、はっきりした自覚を与えるものはなからう。

その自覚を内にして。外からはさまざまなうれしいこと、楽しいことが、つぎつぎにやってくる。よい着もの、新しい服。うまいおやつ、おいしいごちそう。凧あげ羽根つき、歌かるた。それがお正月である。

ある書き手がいった。「政治の舞台には老人が中心になる。戦争の舞台には軍人が中心になる。しかしお正月の舞台には子どもが中心になる」と。

正月三か日。否、五日、七日まで。お父さんもお母さんもおかしいお面をとって、お母さんもやかましい唇をぬぐって、子どもを中心に、本位に、思う存分よろこばせ、楽しませてやろう。その時の子どもものうれしさ楽しさは単なる感情的でなく、おのずから一種の自覚に裏づけられている。一年に一度の特別なうれしさ楽しさなのである。

春は「解放」。夏は「開放」。秋は「透徹」。冬は「沈潜」。そうしてその「沈潜」からまた「解放」へ、運転循環、継続関連。自然の教育プログラムは無尽蔵であり、無制限である。